Osaka University Knowledge Archive

Title	嵇康小論 : その「遊び」の精神
Author(s)	平木, 康平
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1973, 6, p. 33-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12643
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

嵇康小論

―その「遊び」の精神―

平木康平

一

儒教による強固な一元的政治統制を維持してきた後漢王朝は、内外の擾乱によって、三世紀の初頭には、もはや国家としての機能を十分に果しえなくなってくる。それまでは儒教という強度な国家的フィルターによって、透過することを阻まれていた諸々の学問・思想あるいは文学・芸術が、そのフィルターの欠落に伴って、一斉に噴出してくる。これが魏晋の時代である。この時代は政治統制が極度に弛緩し、政治的には分裂混乱状態の下に置かれていたが、その反面、文化的には多彩な展開を示し、活況を呈した時代である。これに対して、政治が他の一切に優先して独走する漢代は、政治的には安定した質実な時代ではあったが、文化的には貧相で硬直した野暮な時代であった。

政治や軍事といった実務にのみ没頭して、芸文に関心を寄せる余裕のない無骨な人間を、俗人と見做して軽蔑する風潮が、魏晋のあたりに盛んになってくる。所謂竹林の七賢が世に迎えられたのは、その反影である。就中、七

賢の一人嵇康は、この風潮に生きた典型的な人物である。彼はそれまでの時代には見られない、魏晋の時代にして初めて生まれえた、新しいタイプの人間であったように思われる。

この小論は、魏の時代を象徴的に生きた嵇康をとりあげ、その人間像を浮彫りにし、併せて彼の生きた魏の時代の性格について、些かの考察を試みようとするものである。

二

嵇康、字は叔夜、譙国銍の人なり。其の先姓は奚、會稽上虞の人なり。怨を避くるを以て徙る。康　早く孤にして、奇才あり。遠邁にして群せず。身長七尺八寸。詞気に美にして、風儀あり。博覧にして、荘と老とを好む。常に養性服食の事を修め、琴を弾き詩を詠ず。魏の宗室と婚し、中散大夫に拝さる。康　言論放蕩にして、典謨を非毀す。故に年四十にして、東市に刑せられる。

以上は晋書本伝を節録したものであるが、嵇康のおおよその輪郭が、ここにほぼ写し出されていると考えてよい。嵇康が生まれたのは、魏の文帝の黄初四年、即ち西暦二二三年のことである。因みに、その同じ年には蜀漢の劉備が歿しており、その前年二二二年には孫権が事実上呉の国を建て、更にその前年二二一年には劉備が帝位に即き国号を漢と称している。更にまたその前年二二〇年には、曹操が歿し、その後を承けた曹丕が禅譲の形式で後漢の献帝より位を奪い、魏がここに成立している。

また、嵇康が四十歳で司馬昭に誅殺されたのは、魏の元帝の景元三年、即ち西暦二六二年のことであり、同じ年に司馬昭は晋公に封ぜられている。その翌年二六三年には、蜀漢が魏の攻撃を受けて滅び、その翌二六四年には、

司馬昭が晋王となり、その翌二六五年には、司馬昭が歿し、後を継いだ司馬炎が帝位に即き、国を晋と号し、魏はここに滅亡した。

かくの如く嵇康は、魏の成立に後れること三年にして生まれ、魏の滅亡に先だつこと三年にして歿した、純然たる魏の人である。恰も魏と倶に生まれ、魏と倶に歿したかの如きその生涯であった。これは唯単に、嵇康の生涯と魏の興亡とが、偶々時間的に符節を合したことを意味するに止まらず、それ以上の浅からぬ因縁が、その間にあったことをも意味する。晋書本伝に據れば、嵇康が司馬氏の手に罹って処刑された主なる理由は、「言論放蕩」にして、「時を害し教を乱る」ためであった。又彼が将に刑せられんとする時、太学生三千人がその助命を嘆願したと言う。これらからも判るように、嵇康は時の社会に対して多大の影響力をもち、当時の思想界に隠然たる地位を占めていたのである。それに加えて、魏の王室の一員でもあった嵇康の存在が、[1]魏の王室の権力を次第次第に簒奪しつつあった司馬氏にとって、看過できぬほどのものであったことが窺えよう。魏の時代精神を形成し、魏の時代を象徴的に生きた嵇康の誅殺は、魏の時代精神の終焉を告げるものでもあった。

三

後漢の人士は、殊に礼法を重んじ、些かなりとも礼法に違う行いがあれば、終生士林に容れられなかった。[2]また漢代の官吏の登用は、「孝廉」「方正」といった儒教的徳目を名とする選挙制度に主として據っていたが、そこでは名節の士が専ら尊重せられていた。[3]儒教道徳が普ねく行き渡り、士人は偏えに修身に意を用いたがために、質実鈍重の風気が盛んとなり、儒教的な良風美俗が醸成されていった。

しかしその反面、人間精神の自由なる発散の途が杜絶され、一方に「求安の士は乃ち志を詭(た)めて俗に従ふ」と言うように、多くの偽善者達を生み出していった。学問は経学の独占する所となり、文学や芸術は、総て儒教のための勧戒の具としての従属的な地位しか与えられていなかった。文化は個性のない画一化された様相を呈し、多様な展開を妨げられることになった。

あらゆる面で、漢代を支えてきた儒教が、後漢王朝の衰退に伴って、漸くその権威を失いはじめ、儒教的価値体系が崩壊の兆を見せてくるようになる。従来絶対的なものとして、盲目的無反省に受け容れられてきた儒教的価値体系を、その根柢から洗い直し、新たな視点から問い直そうとする動きが、漢末魏初になると、やがて胚胎してくる。儒教に対する検討批判の過程で、一部にその徹底的な破壊が試みられ、その上で新たな価値体系への模索彷徨が始められていった。

漢代に於いて、学問は経学が独尊の地位を占めていたが、魏晋に入るや、玄儒文史の兼習が、士大夫の理想とされるようになり、[4] 玄学と文学と史学が経学から独立した地位を獲得し、学問が遽かに多様性を帯びてくる。こうした風潮は芸術の方面にも及び、嵇康は従来の儒教的音楽観を批判し、儒教に隷属させられていた音楽に、独立した地位を与えるべきであるという主張をなしている。

嵇康が批判したところの従来の儒教的音楽観とは、礼記楽記篇に見える次のような内容をもっている。

治世の音は安らかにして以て楽しめるは、其の政　和らげばなり。乱世の音は怨みて以て怒れるは、其の政乖(そむ)けばなり。亡国の音は哀しみて以て思(かな)しめるは、其の民　困しめばなり。声音の道と政とは通ずるなり。宮は君たり、商は臣たり、角は民たり、徴は事たり、羽は物たり。五者乱れざるときは則ち恬澹の音なし。宮

の乱るるときは則ち荒ぶは、其の民　驕ればなり。商の乱るるときは則ち陂くは、其の民　壊るればなり。角の乱るるときは則ち憂ふるは、其の民　怨めばなり。徵の乱るるときは則ち哀しむは、其の事　勤るればなり。羽の乱るるときは則ち危きは、其の財　匱しければなり。五者皆乱るるときは、迭ひに相ひ陵ぐ。これを慢と謂ふ。此くの如きは則ち国滅亡するに日無けん。

これに據れば、音楽と政治は相関関係にあり、宮商角徵羽の五音を、君臣民事物の五者に配当し、五者のうちいずれかが正しきを失うと、それに対応する音に乱れが生ずる。従って太平の世の音楽は安楽であり、乱世の音楽は哀思であると説かれる。これは当時一般に受け容れられていた音楽観であると考えて差し支えないと思われるが、これに対して嵇康は「声無哀楽論」の中で、次のように厳しく反駁を加えている。

いま甲の賢なるを以て心に愛し、乙の愚なるを以て情に憎むときは、則ち愛憎は宜しく我に属すべく、賢愚は宜しく彼に属すべし。我　愛するを以てして、これを愛人と謂ひ、我　憎むを以てして、これを憎人と謂ひ、喜ぶ所は則ちこれを喜味と謂ひ、怒る所は則ちこれを怒味と謂はんや。此れに由りてこれを言はば、外と内と用を殊にし、彼と我と名を異にす。声音は自ずから当に善悪を以て主と為すべければ、則ち哀楽に関はることなし。哀楽は自ずから当に情を以て感じ、而る後に発すべければ、則ち声音に係はることなし。

ここで嵇康が主張するのは、音楽には音楽それ自体の価値として、善し悪しの差等はあるが、哀楽が音楽自体の中に具っていると考えるのは誤りで、哀楽はそれを聞く人間の情感の側に属するものである、ということである。また「夫れ方を殊にし、俗を異にすれば、歌哭同じからず。錯りてこれを用ひしむれば、或ひは哭を聞きて歓び、或ひは歌を聴きて感しむ。」と言い、従来説かれてきた太平の音楽は安楽であり、亡国の音楽は哀思であるといった

考え方を、理由なきものとして斥けている。これは、音楽を政治や道徳の領域から分離し、純粋に音楽のための音楽として独立させようとする、芸術至上主義的立場を宣揚したものとして受け取ってよいであろう。こうした嵇康の、音楽を実用から切り離して一個の芸術として取り扱うべきだという考え方と並行して、この時代には既に文学や絵画や書なども、やはり実用から離れて独自の芸術としての領域を獲得する傾向にあった。(5)

四

嵇康は、「釈私論」の中で、「名教を越えて自然に任す」と言い、あるいは「心を是非に措くなし」と言い、己れの判断や行為の拠るべき基準を、世に広く行われている儒教的道徳規範に求めずして、己れの心の内に求めようとした。己れの内側から自然に湧出してきた「情」と「欲」とを隠蔽せず、そのまま外に表明することを「顕情」と言い、たとえそれが世の所謂「善」に背き、また「道」に違う結果を齎(もたら)したとしても、何ら憚る所はないと説く。逆に、己れの「情」と「欲」とを秘匿して、ありのまま外に露わさないことを「匿情」と言い、たとえそれが「道」に志し善を存し、心に凶邪の念なき」場合であっても、何ら嘉する所ではないと説く。そして前者の立場を「公」とし、後者を「私」とし、その「公」こそ尊ばれねばならぬと言い、その「私」をば釈き放つべきことを論ずるのであるが、これが「釈私論」という論題の語義である。

このように、人間精神の自然な偽らざる発露を何にもまして重んじ、その本来なる自然性の恢復を目ざした嵇康は、まず何よりも礼教の桎梏を打破せねばならぬと考えていた。それは「難自然好学論」の中で次のように主張されている。

六経は抑引を主となし、人の性は欲に従ふを歓びとなす。抑引すればその願ひに違ひ、欲に従へば自然を得ん。然らば則ち自然の得らるるは、抑引する六経に由らず。性を全うする本は、情を犯す礼律を須たず。

この「難自然好学論」は、嵇康が張叔遼の「自然好学論」に反対して、人間が学問を好むのは、決して自然の本性に基づくものではないことを論じた一文である。人間が学問を積み経典を明らめるのは、それを以って稼穡に代え、栄華を致さんとするがためであると説き、次のように言う。

終年馳騁して、思ひは位を出でず。族を聚めて献議すれば、唯だ学を貴しとなす。書を執り句を摘み、俛仰して咨嗟し、其の言を服膺せしめ、以て栄華をなさしむ。

今や世の学問が、専ら立身栄達の手段となり下り、また礼律が「矯飾の言もて世俗の誉れを求むる」偽善者達を夥しく生み出したことに対して、嵇康は忌憚なき批判を展開する。

いま若し、明堂を以て丙舎と為し、諷誦を以て鬼語と為し、六経を以て蕪穢と為し、仁義を以て臭腐と為さば、文籍を覩れば則ち目は瞧れ、揖譲を修むれば則ち傴に変じ、章服を襲ぬれば則ち筋を転じ、礼典を譚ずれば則ち歯は齵はる。是において兼ねてこれを棄つ。

政治的現実に埋没して、世俗に阿り、己れの本心を欺いてまで、栄達を企てる俗人達のあさましさを見たればこそ、嵇康は意識して俗人達が敬々しく奉ずる礼教を、殊更踏みはずした言動を弄さずには居られなかったのである。嵇康は、権勢ある者や世務に泥む者達を徹底して軽蔑した。例えば、世説新語簡傲篇及びその注に引く文士伝と魏氏春秋とに、次のような逸話が載せられている。

鍾會は大将軍兄弟（司馬師・司馬昭）の匿しむ所と為る。康の名を聞きて造る。會は名公子なり。才能あるを以

て貴幸せらる。肥に乗り軽を衣(き)て、賓従雲の如し。康　方(まさ)に箕居して鍛し、會の至るも、これが為に礼せず。會深くこれを銜む。復た呂安の事に因りて、遂に康を譖す。

鍾會は、司馬氏に厚い信任を得て、当時並ぶ者なき権力者で、生殺与奪の権を握っていた人物である。世説新語賞誉篇に、裴令公が鍾會のひととなりを評して「鍾士季を見るに、武庫を観るが如く、但だ矛戟を覩るのみ」と言っているが、こういう武器を帯び権力に阿附する野卑な鍾會こそは、嵇康の嫌悪して止まない俗物の最たるものであった。

「終年馳騁して、思ひは位を出でざる」俗人達の手に汚されて、無下に卑しくなりゆく蕪雑で安価な現実に対して、嵇康は憤激を隠すことができなかった。「卜疑」の中で、彼は「人情萬端、利の在る所、鳥の鸞を逐ふが如し」と言い、又「六言詩十首」の中で、「哀れなる哉、世俗は栄に殉ひ、馳騖して力を竭くし精を喪ひ、得失相ひ紛れて憂ひ驚き、自ら貪り勤苦して寧からず」と言う。ここで彼は、世道人心の利欲に奔ることの急で、恥ずることを知らない厚顔さと、権力や地位を求めて血眼になっている野蛮さとに、顰蹙しているのである。嵇康は、世人が多大の犠牲を払ってまで追求しようとしている富と栄華が、如何に戦慄に満ちた危い基礎の上に成り立っているかということを、身近な体験を通して熟知していた。

富貴尊栄は、憂患諒に独り多し。（秋胡行七首其一）

栄名は人身を穢し、高位は災患多し。（与阮徳如詩）

名行顕はれて患ひ滋く、位の高く勢の重きは、禍ひの基なり。（六言詩）

これらの言は、同族知友をめぐる血腥い闘いの迹を[6]、悉くその眼で見た上での実感であった。「将に名位を以

て贅瘤と為し、資財もて塵垢と為さんとす」という「答難養生論」の言葉は、その実感に導かれたものであった。

五

偽善と隠謀と欺瞞とに満たされた政治的現実に、如何に身を処すべきかを、嵇康は己れに問うて「答二郭詩」の中で、次のように言う。

詳らかに世務に凌るを観るに、屯険にして憂ひと虞れと多し。施報更ごも相ひ市り、大道は匿れて舒びず。
夷路は枳棘を殖す。心の安きは将た焉くにか如かん。

右と同じ詩の中で、「漁父は好みて波を揚ぐ。逸すと雖もまた已に難し。余の嘉する所にあらず」という彼は、「佞を恥ぢて直言すれば、禍ひと相ひ逢ふ」（秋胡行）という没義道なる現実に対して、それを正すべく道理を尽くして語りかけ、また働きかけることを、もはや無益となし、徒らに波を揚げることの愚を悟るに至る。

「家誡」の中で、嵇康は、「吉を伝へること遅く、凶を伝へること疾く、又好みて人の過闕を議する」小人輩と交わらず、世俗の事件に対しては、常に傍観者としての態度を貫き通せと、家子に向って戒めて次のように言う。

坐中言ふ所は、自ずから高議にあらず。但だ是れ動静消息にして、小小の異同は、但だ当に高視すべく、和答するに足らざるなり。
人の相ひ與に変争すること有りて、未だ得失のある所を知らざれば、慎しみてこれに豫かること勿れ。

この外、争いの兆が見えたり、他人が私語しているのを見たりした場合は、直ちに座をはずすように言い、また他人の議論に対しては、「黙して以てこれを観るべく」「辞するに不解を以てすべし」と言って、徹底して静観者の

場を踏み越えてはならないと教えている。それは、「都て大いに争訟する者は小人なるのみ」という透徹した人間観察に基づくものであったが、その「小人」とは、「義に薄く利に重く」、「天下を割きて以て私し、富貴を以て崇高と為す」ところの「当路の士」を指していたことは言をまたない。

嵇康は、俗人に接し、俗事に携わることをあくまでも嫌忌し、政治的な場に足を踏み入れることを固く拒絶し続けた。彼の俗物性嫌忌の主張は、山涛に送った書簡である「与山巨源絶交書」の中に、あからさまに見ることができる。この書簡は、吏部郎の地位にあった山涛が、嵇康にその位を譲ろうと申し出たのに対して、嵇康が役人生活に耐えられない、いくつかの理由を列挙して、それを拒絶するという内容をもったものである。

官途につけば、まず時間的に拘束され、自由な意のままの行動が妨げられること。また煩雑な事務に忙殺され、煩瑣な対人関係に精神をすり減らさねばならないこと。また常に官服に威儀を正して俗人の応待をし、世俗の弔喪の礼に服さねばならないこと。以上のような「必ず堪へざる」理由を挙げ、更に役人となるには、「甚だ不可なる」二箇条の理由を示して、次のように言う。

其一「毎に湯武を非り、周孔を薄んず。人間に在りて、此の事を止めずんば、會らず世教の容れざる所となること顕らかなり。」

其二「剛腸にして悪を嫉み、軽肆に直言し、事に遇へば便ち発す。」

従来侵すべからざる聖人として、批判の外に超越していた湯武周孔に対して、これほど痛烈な攻撃をなした例は、外には見当らない。これは如何なる権威や権力にも、また如何なる道徳や慣習にも、拘束され支配されることを潔しとしないという、まことに峻烈なる主張である。

後世、梁の鍾嶸が「詩品」の中で、嵇康の詩を評して、「頗る魏文に似て、峻切に過ぎたり。訐直にして才を露はにし、淵雅の致を傷る」と言っているのは、正しく峻切に過ぎて、「訐きて以て直と為す」（論語陽貨篇）嵇康の性格が、その詩の上に滲み出ている、そこを適確に評されたものと言えよう。

「口に人の過ちを論ぜざる」阮籍の老獪とも言うべき円滑な処世態度を、「常にこれを師とし」て慕いつつも、「未だ及ぶ能はず」と自覚していた嵇康には、善を善とし、悪を悪としなければ承知できない潔癖さがあり、言いたいことを言わずには居れない一途なところがあった。

「家誡」の中で、「夫れ言語は君子の機なり。機動き物応ずれば、則ち是非の形著はる。慎しまざるべからず」と、家子に向って特に言葉には慎重であるように教え、又「釈私論」の中では、「心を是非に措かず」と語りながら、いざ実際の事柄に直面すると、「惟だ此の褊心、臧否を顕明にする」（幽憤詩）のであり、「吾れ直性狭中にして、多く堪へざる所あり」（与山巨源絶交書）、「萬石の慎しみなく、好尽の患あり」（同上）という具合であった。

嵇康が、三国志王粲伝に附載された其の伝に、「尚奇任侠」と評され、又世説新語文学篇注に、「傲世不羈」と記され、又同じく雅量篇注に、「軽時敗俗」と録されている記事を勘合してみる時、彼が世俗の道徳慣習の外に独歩する任誕放達の士として、一般からも見做されていたことが知られる。

ところで、ここで一言すべきは、嵇康が、山涛のあの勧誘に従って政界に進出し、栄達をはからんと欲すれば、それは十分可能なはずであった、という点である。三国志の注に引く魏氏春秋に、「大将軍（司馬昭）嘗て康を辟さんと欲するも、康は既に世と絶つの言あり」とあるように、嵇康は他の機会でも自ら辟召を辞退しているのである。又嵇康を高く評価し、「我当年以て友と為す可き者は、唯この二生（阮籍・嵇康）のみ」（世説新語賢媛篇）　という山

涛は、司馬師・司馬昭・司馬炎の三代に亘って仕え、吏部尚書という選挙の元締めの地位にまで至り、重用されているほどであるから、尚のことその官界進出は、望めば可能であったはずである。

嵇康の子・紹は、この山涛の厚誼に據り、康の歿後、官にとり立てられており、また康の兄・喜は、「当世の才あり」と言われた人物で、康より後まで生き、司馬晋に仕えて太僕宗正にまで至っている事実もある。これらの諸事実から推し量れば、嵇康にとって、その意欲さえあれば、決してその栄達の途は閉ざされていなかったことは明らかである。

前代の逸民が、政界に志を得ず、不本意な落伍者として、世俗に容れられず、退隠生活を余儀なくされたことと、(7) 嵇康が自らの意志で、その機会があったにも拘らず、官途に就くのを拒絶したこととでは、両者の間に著しい相違があったことに、この際注意しておいてよい。

六

以上見てきたように、嵇康は儒教を排し、名利を退け、政治的な場に足を踏み入れることを固く拒絶した。嵇康の生得の、あるいは幼少期の環境によって醸成されたところのひととなりが、「巖々として孤松の独立するが如し」(世説新語容止篇)と山涛に評されたように、どこか取りつきにくい上に、おそらく彼は、世に処していくに拙い人であり、世俗と波流をともにするには不向きなように、初めからできていたように思われる。それは彼自身、「恨むらくは自ら身を用ゐること拙くして、意に任せて永思多し」と その「述志詩」で言うように、十分に自覚するとこ

ろでもあった。また「幽憤詩」の中でも、次のように述懐する。

其の過ちを寡くせんと欲するに、謗議は沸騰し、性として物を傷らざるに、頻りに怨憎を致す。……咨余淑からず。累ひに纓り虞れ多し。天より降れる匪ず。実に頑疏による……

また「久しく事と接すれば、疵釁日に興り、患ひなからんと欲すと雖も、其れ得べけんや」と、処世の拙さをかこち、俗事の煩わしさに耐え難いものを感じ続けていた。そして嵇康が、「神気晏如たらしめん」には、「楽道閑居して、世に営むなき」より外に道はないと感ずるに至ったのは、自然の勢いであった。彼は世俗を逃れて、山林の中での隠栖生活を志向するようになる。

隠者の生活を望んでいた嵇康は、古の隠逸の高き風気を慕って、「高士伝」を編纂し、また当時実在した隠者王烈と倶に山沢に薬を求めたり、あるいは汲郡の山中に、隠者孫登を訪ねたりしている。

康は又王烈に遇ひ、共に山に入る。烈嘗て石髓の飴の如きを得、即ち自ら半ばを服し、余半を康に与ふ。皆凝りて石と為る。又石室中に於て、一巻の素書を見て、遽かに康を呼びて往き取らしむ。輒ち復た見えず。烈乃ち歎じて曰く、叔夜は趣　常に非ざるも、しかも輒ち命に遇はざるなりと。（晋書巻四十本伝）

嵇康　汲郡の山中に遊び、道士孫登に遇ひ遂にこれと遊ぶ。康の去るに臨み、登曰く、君の才は則ち高きも、保身の道は足らざるなりと。（世説新語棲逸篇）

ここで注意を惹くのは、王烈からも、孫登からも、嵇康は非命に斃れるであろう不吉な将来を、予言されていることである。隠者の眼から見れば、嵇康には、その隠逸への憧憬の悩ましさにも拘らず、隠者たるの資格に欠ける何ものかがあったに相違ないのである。

ところで、孫登が如何なる人物であったかを知る手掛りとして、世説新語棲逸篇の注に引く康集序の次の記事がある。

孫登なる者は、何許の人なるかを知らず。家無く、汲郡の北山の土窟に住む。夏は則ち草を編みて裳と為し、冬は則ち披髪して自ら覆ふ。好みて易を読み、一絃琴を鼓す。見る者は皆親しみて、これと楽しむ。

又同じ注に、王隠晋書を引いて、次のように言う。

孫登は即ち阮籍の見る所の者なり。嵇康は弟子の礼を執り、これを師とす。魏晋は去就に嫌疑を生じやすく、貴賤並びに没す。故に登は或ひは嘿すなり。

隠逸ということに徹底しようと思うならば、この孫登の如くにならざるを得ないであろう。ところが、孫登に弟子の礼を以って事えた嵇康は、そこまで徹底しえなかったのである。無一物境に徹した、ひたぶるの世捨人に同感はしえても、彼自身は唯それを讃歎し、些かの模倣を試みるに過ぎなかったのである。

彼は俗に叛きはしたが、俗から完全に離脱することもできなかったし、まして俗を超絶することもできなかった。嵇康の胸中には、世俗を超絶したいという激しく悩ましい憧憬と、世俗に対する断ち切り難い執着とが、同時に混り合って存在し、彼の心はその両極の間を絶えず行きつ戻りつ、たゆたい続けていたように思われる。

嵇康は社会から孤絶した異端者には違いないが、その立場は実に不徹底で、曖昧かつ不明瞭な存在であった。言わば、その一方の足を世俗の外に、他方の足を世俗の内に踏んでいる、半隠半俗の生半の遁世者であったと、考えてよいであろう。とどのつまり、嵇康は、恰も市中と山中との中間地点とも言うべき「竹林」に、己れの生活の場を見出したと言えるであろう。そして、その「竹林」の中から、右に山巓の高きを仰ぎ、左に世俗の低きを見下し

ていたのである。

このように、叛俗の精神を懐きつつ、世俗に即かず離れずの生き方をする曖昧さが、外でもなく、嵇康を特色づけている点であると考えられる。

七

ところで、晋書本伝に「学は師受せざれども、博覧にして該通せざるなし」とあるように、嵇康は博学の人であったが、中でも老荘の学は、とりわけその愛好するところであった。

又嵇康は、多芸多才な人物で、様々な方面に関心を有し、諸芸諸道の優れた荷担者であり、かつ良き理解者でもあった。

まず彼は文学の才を有し、詩をよくしたが、今に少なからぬ数の作品を残している。(8) 後世のその評価も決して低くはない。例えば、「文心彫龍」體性篇に、「叔夜は儁俠なり。故に興高く、采烈なり」とあり、又「詩品」で鍾嶸は、嵇康の詩を中品に置き、頗る魏文に似て、峻切に過ぎ、淵雅の致を傷る。然れども託喩清遠にして、良に鑑裁あり。亦未だ高流たるを失はず。」とあることによっても知られよう。

また、彼の多くの優れた才能の中で、特に秀でていて、深い関心を寄せていたのは、音楽、とりわけ琴の方面であった。琴の名手であった彼は、晋書本伝に次のような逸話を残している。

康嘗て洛西に遊び、暮に華陽亭に宿し、琴を引きて弾ず。夜分忽ち客ありて、ここに至る。称すらく是れ古人なりと。康と共に音律を談じ、辞致清辯なり。因りて琴を索めてこれを弾き、広陵散をつくる。声調絶倫な

り。遂に以て康に授け、仍りて人に伝へざるを誓ひ、亦其の姓字を言はず。

また嵇康は、四十歳にして刑刃に斃れたが、その処刑を直前にして、「日影を顧視して琴を索め、これを彈きて曰く、昔袁孝尼、嘗て吾に従ひて、広陵散を学ばんとせしも、吾毎にこれを靳固す。広陵散は今に絶えたり。」（世説新語雅量篇）という逸話も残しているように、死の直前まで、手から琴を離さなかった程の愛着ぶりを示している。

また長篇の「琴賦」を作り、琴の徳の優れていることを称讃して止まない。その序に、「余少くして音声を好み、長じてこれに翫せり。おもへらく、物には盛衰あれども、此れには変なし。滋味には厭くことあれども、此れには勧むことなし。以て神気を養導し、情志を宣和すべし。窮独に処りて悶へざる者は、音声より近きはなし。」と言うように、嵇康は若い頃から、管絃を愛好する数寄者肌の人物であった。彼は詩を作っては、屢々琴の事に及んでいる。また既に述べたように、「声無哀楽論」を作って、儒家の伝統的音楽観を退け、音楽のための音楽という考え方を提唱した、芸術家肌の人物でもあった。

嵇康は、また絵画にも関心をもち、それにも手を染めている。「歴代名画記」（巻五）は、画を能くする晋人二十三人の一人に嵇康の名を挙げ、「嵇康能く詞を属し、善く琴を鼓し、書画に工みなり」という記事を載せている。その注に、「獅子の象を撃つの図、巣由の図、代に伝ふ」とあり、その作品は唐代にはまだ残されていたと言う。

また嵇康は甚だ器用な性質で、工芸の道にも堪能であった。「世説新語」簡傲篇に次のように言う。

鍾士季……俱に往きて康を尋ぬ。康　方に大樹の下に鍛す。向子期は為に鼓排を佐く、康は槌を揚げて輟めず。傍に人無きが若し。時を移すも一言も交へず。

又その注に「文士伝」を引いて、次のように言う。

康は性として絶だ巧みにして、能く鉄を鍛す。家に盛んなる柳樹あり。乃ち水を激して以てこれを圜む。夏天甚だ清涼なり。恒に其の下に居りて傲戯し、乃ち身自ら鍛す。家は貧なりと雖も、人の鍛を説ぶ者あらば、康は直を受けず。唯親旧鶏酒を以ちて往き、与に共に飲噉し、清言するのみ。

これによれば、嵇康は、鍾會の来訪にも、作業に没頭して、手も休めず、一顧だにしなかったと言い、又その細工を喜ぶ者がいれば、無償で人に与えたと言うが、技芸に優れた人にあり勝ちな、一徹者の名人気質を、そこに感じさせるものがある。そして彼の鍛冶は、決して利を目的とする生業ではなく、あくまでも趣味の「遊び」に外ならなかった。

その家には大きな柳樹が植えられており、その周囲に川の水を引き込み、夏日は常にその涼蔭で清遊していたと言う。嵇康が、清貧に甘んじつつも、現実の生活そのものを芸術化する閑居の数寄者であり、趣味を解する風流の人であったことを思わせる。

このように、多趣味で多芸多才な嵇康が、趣味を解さぬ野暮な俗人と絶縁して、竹林の隠栖生活に入るや、ますますその趣味に没入し、趣味に遊ぶ風雅風狂の世界を育てあげていったと考えられる。そしてそれは、人生に対する諦観に裏づけられて、世俗の何ものにも拘束されない、自律的かつ無目的な風雅な「遊び」の世界へと昇華されていった。これは純粋に「遊ぶ」ことそれ自体にのみ意味があり、物質的利害や世俗的道徳規範などの関与を厳しく拒絶し、それ以外何の意味をも持たない「遊び」の世界であった。

「世俗の栄華を顧みず。酒食を欽ばず。俗の楽しむ所は糞土となす」（難自然好学論）と言う嵇康は、巷間の豪奢な生活を喜ばず、田園に於ける簡素な清貧の生活を、寧ろよしとして楽しんだ。また晋書本伝に、「毎に薬を採り

て山沢に遊ぶ」とあるように、嵇康は屢々山野に出遊し、山水自然に親しみ、琴をひき詩を吟じ、時には魚鳥を捕えて楽しんだという。それに言及した記事は、「酒会詩」をはじめ、その作品の随処に見出すことができる。嵇康は、人との交わりを好まず、花鳥風月を愛で、風流韻事に心掛けて、趣味の生活に遊ぶ「竹林」の数寄者であった。

八

以上これまで、嵇康の人間像を浮彫りすることに務めてきたが、ここで改めてその像に注目する時、思い当ることは、紛れもなくこれは、後世の所謂「文人墨客」のイメージに合致し、ほぼ違わないということであり、同時に、それは後に続く六朝貴族の面影とも重なるということである。

今さし当って、嵇康より以前に、「文人」と呼びうる人物を見出すことは、おそらく困難であろう。してみれば、嵇康こそは、「文人」の系譜を考える場合、そのまず最初に位置づけられねばならない人物であると言えよう。

この嵇康の生き方は、時教を乱害し、風俗を紊乱するものとされ、時の権力者の容認せざる所となり、嵇康は刑刃に斃れることになった。

しかし、その生き方は、後の世に永く深い影響を及ぼし、「文人」の原型となり、同時に六朝貴族の一つの原型となった、と断言しても差し支えないように思われる。

注

（1）侯外廬等「嵇康的心声二物論詭辯思想」『中国思想通史』第二巻下冊、三聯書店、六一五頁以下。
（2）狩野直喜、『魏晋学術考』、筑摩書房、昭和四十三年、一二五頁。
（3）好並隆司、「曹操政権論」、岩波講座『世界歴史』巻五、昭和四十六年、一四一頁以下。
（4）森三樹三郎、「六朝士大夫の精神」『大阪大学文学部紀要』巻三、昭和三十年、二七三頁以下。
（5）狩野直喜、前掲書、一二八頁以下。
（6）福永光司、「嵇康における自我の問題」『東方学報』京都第三十二冊、昭和三十七年、九頁以下。
（7）吉川忠夫、「六朝士大夫の精神生活」岩波講座『世界歴史』巻五、昭和四十六年、一四一頁以下。
（8）『嵇康集』、魯迅輯校本、一九五六年、北京、文学古籍出版社、一三頁以下。

（大学院学生）